

# 名乗り

(音信不通 ⑦)

奈良 敏行



小冊子に「音信不通」と名づけたのだが、不通のなかに音信を寄せていただいたりして、音信不通という名のりの不思議に想いを馳せている。「名のり」が人を呼ぶということがあるのだろうか。

「名乗り」について考えてるのだけど、と周囲に問いかける。いろんな反応を知る。狸穴千枝さんは、それなら『獵人日記』（ツルガーネフ）の「歌うたい」だと教えてくれる。

冒頭、次のように始まる。……コロトフカという小村は、

かつては、威勢がよくはきはきした性質のために近郷近在で「やかましや」（本名はついに知られずにしまった）とあだ名されていた女地主のものだった。……「あだ名」と「名乗り」、どう関わるのだろうか。いずれにしろ、近郷近在という狭い場所を必要とするのは間違いない。

パチクリ、抜作、ジーズドラの請負師、暴れ旦那、こんな呼び名の曲者たちが居酒屋に寄り集まって歌うだけの話だ。そして、居酒屋を出て、谷間の道にさしかかると、……不意に野のどこか遠くの方で男の子のよく徹る声が聞こえた。「アントロープカー! アントロープカー!」……野原の反対の方向から、まるで別世界からのように、やっと聞きとれるくらいの返事が聞こえてきた。「なんだーあーあーあーい?」

ここで二つの道具立てに出会う。あだ名で語られる世界。そして響きあう「名乗り」。

ビオトープを合言葉に互いに冊子メディアの本柱を立てて起こそうとしている結川真悟さんとの出会い、彼がはじめにシネクラブに参加するために、レジカウインターでわたしに声をかけたときだ。二階へのにじり口を聞かれたんだけど、ふと心にとまるものがあった、「お若いようですが、仕事はしてるの?」とたずねるでもなく、あいさつ代わりに話をふった。しているといえはしているし、し

ていないといえはしていない、今にしてみれば、絶妙の問  
いであったかもしれない。委細は結川さんの連載にゆだね  
るが…。

けものみちを共にするため、冊子の筆名のかたわらに  
「名乗り」を併記しようと最近提案した。名乗りには「場  
の重力」がある。渡世という言葉にもそのような独特のち  
からがある。世渡りする、その「世」が少し違い、その「世」  
が名乗りをおのずと準備する。

わたしの名乗りはなんだろう。まっすぐ言えば「本屋渡  
世」だ。ここで、「屋」ということばにこだわらる。「屋」  
というのは、くをもっぱらとする人、という意味だ。てれ  
屋、はずかしがり屋、いばり屋、とか用いられる。本が好  
きな人はたくさんいる。でも本をもっぱらとして生きる  
したら、とても世界を狭くするにちがいない。狭いほうが  
生きやすい、本の背に身を隠すという選択もある。話すこ  
とも、ほんの少し本のことだけ。

世界を語る、本という土俵のうえで。この場合、ひとま  
わり外の足場の徳儀に足を置ける本屋は得をしているの  
かもしれない。この本の土俵をたとえて、本のピオトープ  
という。名乗りあっているのは、そんな世界だ。

見える世界がすべてではない、と教えてくれる人もい  
る。この小さな声が聞こえてくるのは、世界が縮減に向か

っていることとパラレルなのではないだろうか。この世界  
は本のビッグバンから始まり、ことばへと縮んでいく。そ  
して音信不通となる。

二つ名だけで、本当の名前も知られない女地主の世界が  
ある。そこで、やはりあだ名でしか呼ばれない人たちが集  
いあう。なんと狭い世界だ。扉を開けて、細々とつづく小  
道をたどるとやがて谷間に出る。ここも人気の少ない草原  
だ。そこに呼び合う声がこだまする。本のピオトープに、  
名乗りして足を踏み入れる。本のピオトープとは、本屋的  
人間の生息する谷間の一角のことだ。

ツルゲーネフは、自分の領地に流刑となり、「獵人日記」  
を記したという。けものみちに人を漁(すなど)る話だっ  
たのだろうか。

2017.01.30

(参考)

ツルゲーネフ 『獵人日記』 岩波文庫 1988 (訳 佐々木彰)